

---

# 少しだけ、ほんの少しだけ.....

雨傘 香介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

少しだけ、ほんの少しだけ……

### 【Nコード】

N8851B

### 【作者名】

雨傘 香介

### 【あらすじ】

あの頃を懐かしむと心がオレンジ色に染まっていくような感じがする。

(前書き)

ブーン系の読み物です。

「少しだけ、ほんの少しだけ」

鬱然と広がるねずみ色の空と、僕の心情を代弁するかのような決して晴れることのない糠雨ぬかあめが降り続く。

(・A、)

「今日は最悪な一日だな」

実際には毎日が最悪な一日である。

何をするにも、何をしたにも失敗ばかりをして、辛うじて決まった就職先のVIP株式会社では大事なお客様の前で失態を犯してしまい本日づけで解雇処分となった。

(・A、)

「あそこで『この前、男の人とホテルの前にいましたよね?』なんて言わなければ……」

後悔先に立たず、僕は強くなる雨声に向かい溜めた息を吐き出した。

僕が今いるのは実家からそれほど遠くない神社で、僕はここでも居ない空間に向かって虚しく愚痴を言っている。それも毎日にしいくらい愚痴や世間話をしている。

そしてこの神社は昔『幽霊が出る』と噂されていた時があつて、友人の内藤とクーとで真夜中に肝試しをした所でもあった。

女性

「ドクオ……」

僕の名前が呼ばれたような気がして雨で軟らかくなった地面から声が出た方に視線を移す。

白色で透き通った綺麗な素足と水色のサンダルがまず瞳に向かって飛び込み、徐々に視線を上へ動かすと汚れのない白いブラウスと傘の柄をいじらしく持つ指先、そしてその先を仰ぎ見ると紅色に彩られた唇が僕に好感を与え、潤んだ瞳が雨傘から現れた。

(A、)

「……」

可憐、その言葉に余る彼女の魅力的な印象は形状を変えて矢となり僕の心を射貫いた。

女性

「ドクオ、忘れたのか？ 私だよ、ほら同じ高校だった……」

彼女の声に、まるで傘から垂れ落ちた水煙すいえんのようにふと我に帰る。そして彼女の何処か懐かしい面輪おもてが脳裏を掠めた。

(A、)

「クー……なのか？」

クー

「ふふ、やっと思い出したか、私のことは忘れられたのかと心配したぞ」

僕とクーは意味も無く微笑み合った。もう会えることのない人が目の前にいるのは不思議な気分がして、そしてそんなクーももう会えることもないと思っていたのに今こうして説明のつかない事態が起きて、笑ったのだろう。

(・A、)

「クーはあの頃とあんまり変わってないな」

クー

「ドクオはあの頃とはずいぶんと変わったな、でもドクオらしさは相変わらずだな」

少しだけあの頃の匂いがした。楽しくて懐かしいそんな匂いが雨の臭いを霞ませ、僕をあの頃へ回顧させる。

……

……

( ^ ^ )

「明日はドクオの近くの神社に行くお！ 決定だお！」

人差し指を天井に向けて張り切っている内藤。意気込みと比例した内藤の大声はクラスの数人をこちらに注目させる。

(・A、)

「ちよつ、静かにしろよ！　つか俺も行くの？」

クー

「なんだドクオ、幽霊が怖いのか？」

(・A、)

「え？　いやそんなんじゃないって！」

(　^　^　)

「じゃあ、ドクオも行くお！　三人で一緒に行くお！」

時季は夏だった。高校最後の夏休み、今後は進路などで色々と忙しくなるのだが、内藤とクーに『夏休み最後の思い出』と称して最近噂になっている僕の近所の神社で肝試しをすることになった。

確かに僕らにとっては今年の夏休みで最後になる。それに進路もバラバラな僕らの『最後の思い出』と言われてしまったら行くしか選択肢はない。僕は何処か腑に落ちない気持ちを無理矢理に頭の片隅へ置いて神社に行くことにした。

(　^　^　)

「何だか夜は怖いお、何か出そうな雰囲気だお！」

(・A、)

「何だよ、もう怖じ気付いたのかよ内藤」

古びた赤い鳥居が三つの懐中電灯に照らされて一層恐怖感を煽る。鳥居はまるでこの世とあの世を区別するように落莫らくぼくと佇み、威圧的

で何処か近よりがたい雰囲気に包まれていた。

クー

「二人とも、遅いぞ！ 早く来い！」

石段で造られた参道からクーは僕らに向かって言った。

(・A、)( ) ^ ^ )

「クー！」

僕達は親に泣き継すがろつとする子供のようにクーの後を追い掛けた。僕は男勝りなクーの背中を見ていて、何て僕は女々しいのだろうか。と自分を不甲無く思いながらも一歩一歩、懐中電灯で足元を照らし踏み締めた。

クー

「ここが幽霊が出ると言う神社か」

神社の全体はカビで黒く変色していて所々利休色りきゅうじの苔が生えていた。僕はクーの背中にしがみついておどおどと辺りを見渡していた。僕は肝試しのことなどとうに忘れ、葉擦れのする境内を歩いていると自我が削がれていくような感じがした。

( ) ^ ^ )

「もういいお！ 帰ろうお！」

(・A、)

「い、言った本人がそれじゃ、は、話になんねえな！」

僕は精一杯冷静さを装った。けれど、がたがたと震えた口許は言

うまでもなく僕の心情を物語っていた。内藤と思いは一緒に、早く帰りたい、その一心だけが曇らず僕に残る。

そんな僕らをよそにクーは先へ先へと止まることなく幽霊を熱心に捜していた。好奇心に駆り立てられたクーを僕と内藤は止めることも出来ずただただクーの踏みしめた足跡を追い掛けている。

クー

「幽霊なんて何処にもいないぞ！ 噂は嘘だったのか」

落胆するクーを後目に僕と内藤は大きく安堵の胸をなでおろした。神社の周辺、神社の中、見える範囲は全て歩いて回った。けれど僕らの目的であった『幽霊』はいなかった。

僕らの『夏休み最後の思い出』は怖い思いをしただけの神社巡りだった。だが涙でぐしゃぐしゃになった内藤の顔を見ているそんなことも良い『思い出』となっていくのだろう、と思った。

……

……

(A、)

「……昔、そんなことがあったよな、クー」

クー

「そつだな、結果的に『幽霊』はいなかったんだ……」

僕とクーは懐旧の情に浸っていた。あの頃の最後の思い出、それは褪ることなく僕の中を温かく映し出す。

(・A・)

「内藤は来てないのか？」

クー

「恥ずかしいから行かない、と言っていたが、内藤から伝言を頼まれている。聞くか？」

僕は軽く首をたてに振り、クーの言葉を待った。

クー

「ドクオ久しぶりだお！ 元気かお！？ 僕は元気だお！ 今日のことだけど、会社を首になったからつてくよくよしなくて次を頑張るお！ ドクオなら出来るお。それにドクオは一人じゃないお、僕とクーが今までも、そしてこれからもドクオを応援しているから大丈夫だお！……………内藤より」

クーは内藤の伝言を読み上げる。僕はそれを聞いている間、目頭が熱くなっていくのが分かった。内藤もあの頃と変わってないな、と僕は思い嬉しくなった。

すると僕を落ち着かせるようにクーの手が僕の肩に据えられる。少し冷たい手は包み込むように僕をクーの胸元へ導く。

クー

「内藤が言ったように、私達は何時もドクオを見ていた、そして何時もこの神社で私達はドクオの話聞いていた。ドクオには辛い思いをさせたと思う。今更ではあるが、すまない、そしてありがとう、それだけをドクオに伝えたかった」

(・A、)

「クー……」

少しずつ薄れていくクー、クーの顔は笑顔と涙に彩られ、口許は言の葉を紡いでいる。

クー

「どうやら時間のようだ。ドクオと少しだけ話せて良かった、ありがとう……」

その言葉を最後にクーの存在は消えていった。

小止みなく降る雨の中、卯の花曇りの空模様から快晴の兆しが見える。

(・A、)

「少しだけ、ほんの少しだけ……まだここに居てもいいよね？」

日差しが淡く風景を銅あかがねに染める。明日を、そして毎日を……まるで夕陽はそれが当然のように、この上ない幸せを僕の瞳に映し続けるのだらう、と僕はそんな所感をぽつりと述べた。

(　^　^　)

「ドクオ、おじさん臭くなっちゃったお」

風が舞い、足音が神社に響き渡る中、何処からか内藤の返事がしたように感じた。



(後書き)

ネタバレですけど、『内藤』『クー』は死んでいる設定です。

神社に肝試しにいった時の帰り道くらいに内藤とクーは車やらトラツクにひかれて死んでしまった、と言うバックグラウンドを話に組み込もうとも思いましたが『有耶無耶感』ってのが言いんじゃないかと。

これのせいで伝わり難いと言われたら僕は枕濡らします、間接的に。内容とは関係ないけれど僕は夕陽が好きです。

夕陽に染まる町並み、その風景を見ていると何だか切なくなっているんですよね。

『あゝもう一日も終わりなんだ……』

とそんなことを思ってしまう。

夕陽は好きですねー、何時になっても。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8851b/>

---

少しだけ、ほんの少しだけ.....

2010年10月10日05時47分発行